

—硬式野球部—



- 体育会名: 関西学院大学体育会 硬式野球部
- 創部年: 1894年(明治27年)
- 2025年度会員数: 221人(4年72人、3年41人、2年52人、1年56人)

- 同窓倶楽部名: 関西学院大学体育会硬式野球部同窓倶楽部
* 関西学院同窓会 公認団体

- 同窓倶楽部通称:
 - 設立年: 1955年(昭和34年)
 - 会員数:

* 物故者含む

関学硬式野球部は全国でも五指に入る歴史と伝統を誇る名門である。古い資料によれば関学普通科で1894(明治27)年ごろ、米国人宣教師により野球のルールを教わり、球遊びから野球の試合らしきものを行うとある。その5年後の99年、同好会グループから「部」の形態になり、胸に“KWANSEI”のユニホームもでき対外試合をしている。部ではこの年を「関学野球の発足の年」と定義づけ、100年後の1999年、高等部、大学が一致団結して「関学野球100年祭」を開いた。その後、2006年には新たな100年に向けて人工芝の第3フィールド野球場が完成。強いチーム作りの大きな後押しとなった。

後にアマチュア野球界のリーダーとなった関学は、勝利を目指すと共に、数多くの優秀な人材も世に送り出した。柳田周蔵は関学中が夏の甲子園で優勝を飾った時の監督で後に佐伯達夫氏(元日本高校野球連盟会長)とともに高野連の立ち上げに尽力した。三輪竹男は元高野連の副会長、稲原幸雄は徳島商監督で“幻の中等学校野球大会”と呼ばれる唯一文部省主催の42年の甲子園大会で優勝。徳島県野球協会理事長、全日本社会人野球協会副会長を94歳まで勤めた。三輪梅松は竹男の実弟で82年に関西六大学リーグが解体、関西学生リーグが誕生した時の初代理事長、池田良雄は関学の黄金期を支えた名監督で、江里口常臣は池田の後の監督を務めた。

以降、現在に至るまで、社会人野球、独立リーグ、学生野球、地域の少年少女チームの指導者や審判員を数多く輩出し、野球界の繁栄に貢献している。

大学野球部は1913年に高等(商)部野球部として誕生。関大、同志社とともに3校リーグ

が発足した。29年に上ヶ原学舎へ移転後、31年に立命館、京大、神商大(神戸大)が加わり関西六校リーグが誕生。翌32年「大学令」により関西学院大学が設立され、改めて関西六大学リーグが発足した。

記念すべき31年秋の第1回リーグ戦は立命館が優勝、2位は関大で3位京大、4位同大、関学は5位で6位神戸大だった。戦前のリーグ戦では、オリジナルメンバーとも言える関学は、残念ながら2位は2度あるものの優勝はなかった。

関学野球が大輪の花を咲かせたのは戦後、47年秋の初優勝だった。ヒーローは中村康男。関西六大学は42年秋から45年秋まで戦争で中断されたが、中村は召集されていた中国から復員。その言葉を借りれば「万里の長城からグラウンドへ直行し」いきなり4番遊撃手で出場、46年春6位、秋4位。47年には主将で強烈なリーダーシップを発揮して春2位、秋のリーグ戦でついに悲願の初優勝を飾った。

優勝校として第1回全日本大学王座決定戦(現全日本大学選手権)に出場、1回戦で東都の専大に0-3と完敗したが、2回戦で東京六大学の慶大に7-6で競り勝った。この後、慶大が専大に勝ち3校同率で優勝預かりとなったが、関東勢と互角に戦ったことは関西の大学野球界に大きな自信を与えた。

中村は卒業後、49~51年に関学高等部監督を務め、後にプロ野球阪急入りした矢形勝洋(後オリックス球団常務)、大学進学後関六で首位打者に輝いた落富士郎らを育てた。社会人野球の日鉄嘉穂



で活躍し、引退後の66年、関学監督に就任。当時の関六は入れ替え戦が導入されており、66年春はあと一歩で新加入の近大に優勝をさらわれた。悔しさを胸に福井県武生で地獄の夏合宿を行い、秋のリーグでは清水正輝、阪神一阪急で活躍しプロ通算72勝の谷村智啓の

二枚看板で立命館、近大に連勝、最後の関関戦も清水で先勝し3戦目も清水が完投勝利を収め、夕暮れの日生球場で中村監督を胴上げした。

47年に中村主将で初優勝してから関学にとって通算11度目の優勝。また中村監督はこの優勝で関学野球部史上初の「選手と監督で優勝」となった。ちなみに45年後の2012年秋、関学は19年ぶり13度目の優勝を飾ったが、その監督こそが1966年のエース清水であり、「選手と監督で優勝」の輝ける2人目となった。

47年の初優勝以後の20年間は、関学の“第1期黄金時代”だった。49年春には勝ち点4で並んだ同志社との優勝をかけた1回戦で、猿丸義之投手が関学初のノーヒットノーランを達成。投球数はわずか81だった。猿丸は2回戦でも同志社を3安打1点に抑え、関学は2度目の優勝を飾った。

50年秋には“放棄試合”という大事件が起こった。10月14日の関関戦、3-2で関大リードの9回裏二死一塁で関学打者が初球をスイング。関大捕手はこれを捕逸したが「ファウル」と判断し追わなかった。走者は三進し、しかも捕手がタイムをかけずにベンチに向かったため走者は生還し同点となった。関大はこの判定を不服として試合再開に応じなかったため没収試合となり、翌日も問題は落着せず関大は連敗となった。

51年春は最終関関戦で関大に連勝し同率首位。一日空けて行われた首位決定戦も8-1で勝ち3度目の優勝を飾った。本庄賢、藤江清志の両輪が絶好調で、2人が最上級生となった52年には第1回全日本大学選手権で愛知大、専大を撃破、決勝の慶大に5-3で敗れたが準優勝を飾った。

本庄は卒業後、社会人野球で黄金期の鐘紡で活躍、監督にもなり産業別大会(現日本社会人選手権)で優勝した。藤江はプロ野球南海に入団、引退後はマネジャー、通訳で貢献し、ブレイザーコーチとのコンビで名著「シンキング・ベースボール」を出版した。同級生で名マネジャーとして名を残した山下達雄とともに連盟マネジャーとして活躍した横沢英雄は、宝塚歌劇団に入り名演出家として違う道で大活躍をした。

53年は川村尚-川本浩司の山城高出身コンビの活躍で第2回大学選手権に駒を進め、

初戦の名城大に5-0で勝ったが、準決勝では中大に5-6で惜敗した。

54年秋は同志社との優勝決定戦に勝ち優勝。55年秋も関大、立命館と勝ち点4で並び3校による優勝決定リーグ戦の末7度目の優勝を飾った。逸材を多く輩出し、54年秋から56年秋まで5季連続で関西六大



大学の首位打者を独占。一方、ライバル校にも関大の村山実一上田利治のバッテリーと強打の難波昭二郎ら素晴らしい選手がおり、関学は3年間覇権から遠ざかる。

59年春のリーグ戦前には「全日本学生野球結成記念大会」が開かれ関六代表で出場した関学は、松山商大、東北大、立教大を倒し、決勝では近畿六大学代表の近大を3-2で倒し優勝した。春のリーグ戦は立命館との優勝決定戦を制して8度目の優勝。6年ぶりに出場した第8回全日本大学選手権は横浜市大、中京大を連破し決勝の早大戦は1-1の引き分け。翌日の再試合は3-2の9回に2点を奪われ逆転サヨナラ負け、歴史に残る熱戦の末、大魚を逸し2度目の準優勝となった。

同年秋は10戦10勝の完全優勝、野球部創設以来初の春秋連覇の快挙を達成した。このチームで1番・三塁手のファイター五藤康之は新三菱三原に就職し、その後、郷里・広島県三原市の市長を長く務めた。

61年オフには“リーグ再編成”という大問題が勃発した。減少する観客数への危機感から関西の全リーグが一つになり“関西大学野球連合”が誕生、「入れ替え戦」が導入された。お尻に火がついたように62年春は関大と優勝争い。勝った方が優勝という関関戦は関六初のナイターで行われ、満員の日生球場で1勝1敗、第3戦は3-4で逆転負けして涙を飲んだ。このリーグで最下位の神戸大は2部に落ち、新たに近大が入り新時代を迎えた。

関学野球部が次に歓喜に包まれたのは、東京五輪の64年だった。関学は監督不在の緊

急事態だったが、関大の1年生エースが前年の公式戦中にすでに広島と契約をしていたことが発覚し春のリーグ戦を辞退するなか、8戦全勝で堂々たる優勝。第13回全日本選手権は、初戦で神奈川大に勝ったものの準決勝で駒大に敗れた。

66年、前述した中村監督のもとで11回目の優勝を飾るが、それは以後27年にわたる“暗黒時代”への序曲だった。何度も2部落ちを経験し部存続の危機にまで陥った。

そうした難局の中でも、のちに監督になる土屋明生、本塁打記録を更新した張間昇平、全日本の主将を務めソウル五輪で銀メダルを獲得した筒井大助、歴代最高の左腕投手といわれた吉木直也など素晴らしい選手たちを輩出した。

82年には関学など6校が旧関西六大学を脱退する形で「関西学生野球連盟」が誕生し、入れ替え戦のない対抗戦形式に改編された。こうした流れの中で93年、関学は78年から就任した土屋監督の手腕と、本荘雅章主将、20年ぶりに復活したスポーツ推薦1期生の木原栄一郎両投手の活躍でついに53季ぶりに優勝した。

他方、近年では田口壮をはじめとする多くのプロ入りした人材を生んだ。

田口は、91年に今もリーグ記録として残る通算123安打を放ち、ドラフト1位でオリックス入り。最多補殺、ゴールドグラブ賞を受賞、阪神・淡路大震災に見舞われた95年には「がんばろう神戸」をスローガンにリーグ優勝を果たし、神戸に勇気をもたらした。96年の日本一にも貢献、2000年シドニー五輪代表を経て、02年大リーグに移籍。カーディナルス、フィリーズで2度のワールドチャンピオンに輝き、現役引退後はオリックスコーチに就任、リーグ優勝に貢献した。

清水誉は06年に阪神入団。現役引退後は、阪神球団本部の職員としてチーム運営に携わり、一軍担当マネジャーとしてチームの優勝を支えた。

07年ドラフトで日本ハムに入団した宮西尚生は、左のリリーフとして12年のリーグ優勝、16年の日本一に貢献。公式戦における通算ホールド・通算ホールドポイントのNPB記録を持ち、「両部門における世界プロ野球記録保持者」とされる。年間の最優秀中継ぎ投手部門では歴代最多タイの受賞記録を誇る。

宮西と同学年の荻野貴司は、社会人野球トヨタ自動車を経て09年ドラフト1位でロッテ入団。ゴールデングラブ賞、ベストナイン、最多安打、スピードアップ賞、盗塁王など数多くのタイトルに輝いた。

岸敬祐は10年にプロ入りし巨人、ロッテでプレー、現役引退後は巨人スカウトとしてチームの人材獲得に貢献している。15年には田村丈が横浜DeNAに入団。退団後は球団職員を経て法人を立ち上げ、野球界を支える活動を展開している。

社会人野球大阪ガスで首位打者、橋戸賞を獲得した近本光司は、18年ドラフト1位で阪神に入団。セ・リーグの新人安打数記録をはじめ数々の記録を達成し、ゴールデングラブ賞、ベストナイン、盗塁王などを獲得。23年の日本一、25年のリーグ優勝を牽引した。

黒原拓未はエースとして関西学生リーグ優勝に貢献し、MVPとベストナインを受賞。21年ドラフト1位で広島に入団した。同学年の山本晃大は独立リーグを経て22年に日本ハムに入団した。

チームとしては12年、大阪桐蔭高時代に4番打者で全国制覇した萩原圭悟主将と蒔野健太投手が活躍し、19年ぶり13度目のリーグ優勝を果たした。13年秋も関学高時代に捕手兼投手で活躍した“野球小僧”山崎主将、初山副将、宇都宮投手らで秋季リーグを連覇、明治神宮大会出場を果たした。

21年にも春を制し、56年ぶりに全国ベスト8に輝くと、24年には59年以来65年ぶり2度目、リーグ発足後初となる春秋連覇の快挙を達成。高らかに名門復活ののろしをあげた。

□硬式野球部 部史 編集担当者

大西 禧充(昭和39年 社会学部)